

(6) 人間と社会教育部会

教育部会名	人間と社会教育部会
部会長名／作成者名	井上 真理
概 要	
<p>(1) 組織・運営について</p> <p>人間と社会教育部会は、1 機構・3 研究科の、非常勤講師を含む 36 人から構成され、基礎教養科目として社会科学系の「社会学」、「地理学」、総合教養科目として「社会思想史」、「文化人類学」、「現代社会論」、「越境する文化」、「生活環境と技術」、「学校教育と社会」の 8 科目を担当している。機構および研究科ごとに、教員の専門領域に応じた担当授業配分がなされており、当該部局のルールによって授業担当者を決め、全体的な調整は部会長（1 名）、幹事（2 名）が取りまとめをしている。当部会の組織構成と運営は適切に整備され、機能していると考えられる。</p> <p>(2) 実施状況について</p> <p>「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリン(社会学, 文化人類学, 地理学, 社会思想史), および②現代的諸課題(現代社会論, 越境する文化, 生活環境と技術, 学校教育と社会)の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供している。</p> <p>当教育部会が提供する授業の目標は、シラバスにも見られるように、全学共通授業科目の科目区分ごとの教育目標に対応しており、授業担当者は到達目標を、共通目標に沿ったものにするよう配慮している。ただし、いずれも個々の学問分野の導入的な内容となっている。</p> <p>教育の目的に照らして、講義、演習、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されている。授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業レジュメと資料は、十分に用意されている。</p> <p>単位の実質化に関しては、多人数クラスのため行き届かない部分も多いが、可能な限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では、毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ双方向的な要素を取り入れることに腐心したり、毎回課題を掲げ学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。</p> <p>授業内容は、概ねシラバスに沿って展開されている。個々の教員は、資料配布、映像・音声資料等の活用、コミュニケーションカード等の活用、双方向的な意見紹介やコメント、高校の学習内容との連続性の確認、受講者の既存の知識や観点を相対化する問題提起等、多様な工夫・努力を行っている。映像を使える講義から理論的、そして純粹に思想的内容の講義まであり、中にはシラバスにおいて大枠で内容を掲載している科目もある。このことに関しては、教員側の想いもある一方で、時代の流れとして詳細なシラバスの標記が求められていることから、話し合いを重ね、同意のもとに、より良い方向になるよう、今後も努力していく所存である。</p> <p>(3) 課題について</p> <p>授業規模には大きな幅がある。人間と社会教育部門の授業は人気が高く、総じて履修者が多い事態には変わりがないが、20人前後から200人前後と多岐にわたっている。教養の大規模クラスに使っている棟は施設として必ずしも授業をしやすいものではなく、長期的にはもっと効率性の高い教室が求められている。大規模クラスで出席を取るとは、必ずしも簡単ではなくまた学生の注意が拡散する。今日、学生は出席点をしばしば望んでいるが、学科の理解と、出席の頻度は、試験結果を見るかぎり必ずしも対応していない。この部門の科目の人文的性格に起因するものかもしれない。</p>	

どういふ学生が受講しており、どういふ形で講義すればもつとも内容の理解が進むか、模索すべき課題が多いのは確かである。各スタッフはこれらについて一層の試行を展開する必要があるであろうし、そのことへの評価も、短期に判断を下せるような事柄ではないように思われる。

学生の授業評価において、自己学修の時間についての設問では、60分未満の学生の割合が多い状況である。授業内のみで終わらず自己学修につなげる努力が望まれる。内容理解や目標への到達度、総合評価に関しては、概ね高い評価が得られていると考えている。しかし、科目によっては評価に幅のみられるものもある。高等学校までの科目と同じ名称の科目であっても、研究手法や視点が異なり、学生が既存のものと考えていた内容と違う科目もある。それを高く評価する学生もいれば、受け入れるのに時間のかかる学生もいると考えられ、そのような科目については幅のある評価を得たものもあるようだ。

平成29年度からクォーター制が実施されている。学生は、1クォーターごとに履修する科目を変えており、授業する側は、その1クォーターのみで科目の概要を示さなくてはならない。しかし、7.5回というのはきわめて短く、とりわけ社会学、地理学、文化人類学、社会思想史等のディシプリンにとっては、この回数で学科の概略を示すことは難しい要求となっている。当然現代の学生にとって面白そうなトピックを並べ、学科に興味をもってもらおうという形の授業となる。受講学生によって異なると思われるが、それで一向に構わない学生もいれば、もう少し学科の概要を学びたいと考えている、あるいは学ぶ必要のある学生も多い。〈人間と社会〉を構成する学科群にとって、クォーター制度は、現在のところ、授業を、トピックのいくつかの並列的提起、そのことによる学科への関心の喚起というレベルに終始させる面が強い。しかしそれでは、学科の基礎の学習にはならない可能性が高いという科目もある。各教師は所定の7.5回分で学科の今日的なあり方の概要を示すべく、試行を繰り返している。今後も工夫を重ねる必要があるであろうと思われる。科目によってはセメスター制の方が適するものもあるが、カリキュラム上の事務的な面から当面の変更は難しいと考えられる。授業内容・方法について、今後も議論を重ねることになると考えられる。

今日の大学では、理論的、思想的学科を学生に教えることは、日々難しくなっている。「教養」科目をなぜ受けねばならないのかわからない、と直接授業の後に訴えに来る学生もいる。今日の受験制度が学生一人一人の学問への「関心」を内発的に育てる形にはなっていないという重大な背景もあり、授業の方法論だけでは処理しきれない問題がある。なにぶん履修者が多い部会であり、試験の採点が2回から4回に増えたことも加わって、採点スケジュールを充たすこと自体が、時間的にも、体力的にも厳しい状況である。そのような状況を考えると部会としては比較的よく健闘していると判断される。

(4) 総合所見

平成30年度は、人間と社会教育部会の外部評価がなされ、部会として取り組むべき問題点・課題を明らかにしていただいた。それ以来、シラバスの統一性をはかること、授業評価アンケート結果の分析と課題の洗い出し、アクティブラーニング・体験型学習の具体的なエビデンス・効果の分析と授業改善への取り組み、クォーター制・セメスター制のメリットとデメリットの分析と授業改善への努力という様々な課題に対して取り組んでいるところである。

神戸スタンダードなどの取り組みにおいて、複眼的に思考する能力や、多様性、協働力を育てようとする取り組みや、さまざまな努力に対して、総合大学のメリットを十分活用した取り組みを行っているとの評価がなされる一方で、取り組むべき以上の問題点に関して、さらなる課題の解決につとめていきたい。

A 組織構成と運営体制について

①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか

機構および研究科ごとに教員の専門領域に応じた担当授業配分がなされており、当該部局のルールによって授業担当者を決め、全体的な調整は部会長（1名）、幹事（2名）が取りまとめをしている。当部会の組織構成と運営は適切に整備され、機能している。

根拠資料

教育部会構成員名簿

B 内部質保証について

①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか

授業にもよるが、毎回の授業毎に履修者に感想用紙、アンケート、課題プリント等を提出させ、次回の授業時に質問・意見等に回答・コメントするなど、日常的・質的な授業評価を行っている。各クォーター末の「授業振り返りアンケート」より、学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を行っている。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果

②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか

複数の機構・研究科にまたがっている中で、自己点検・評価報告書を周知し、個々の問題点を改善するようにそれぞれ努力している。特に教育に関する問題点については、講義、演習、実験、実習等の授業形態を適度に組み合わせ、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導を行い、また平成 29 年度ではあるがピアレビューもしながら、対応を行っている。

根拠資料

前年度までの自己点検・評価報告書、平成 30 年度外部評価報告書、シラバス等

③授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施しているか

平成 29 年度のピアレビューや平成 30 年度の外部評価委員会などに部会員の参加を呼びかけるなど組織的に対応を諮っている。

根拠資料

ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（国際教養教育委員会資料）、平成 30 年度外部評価報告書

④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか

TAなどを配置し、教育活動を展開するために必要な教育補助者を適切に活用している。それらの者が担当する業務に応じて、必要な質の維持、向上を図る取組を諮っている。

根拠資料

神戸大学 SA/TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

C 教育課程と学習成果について

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものであるか

「人間と社会」教育部会は、社会に関する広い視野と深い洞察力を身につけることを学習目標として、①人文・社会科学のディシプリンおよび②現代的諸課題の双方を視野に入れ、多岐にわたる授業科目を提供しており、それぞれの授業の目標が全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものである。

根拠資料
シラバス

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか

授業担当者を始めとする部会員には自己評価報告書や外部評価報告書を周知し、共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされている。

根拠資料
シラバス

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか

授業担当者に周知し、各授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっている。

根拠資料
シラバス、教科書、配布資料

- ④単位の実質化への配慮がなされているか

多人数クラスの場合、行き届かない部分もあるが、可能である限り配慮されている。具体的には、それが可能なサイズの授業では、毎回授業に対するコメントを書かせて提出させ双方向的な要素を取り入れることに腐心したり、毎回課題を掲げ学生の自主自習を促したりするなどの工夫が行われている。

根拠資料
シラバス、教科書、配布資料

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか

授業方法は、授業内容の性格に応じて、映像やグラフ、ビデオ、さらに実験や小集団教育などを使用したものから、すべて講述からなるものまで多様である。授業レジュメと資料は、十分に用意されている。また、シラバスに沿ったレポート課題の設定と指導を行なう、レポートにおいて学生の興味関心のあることを選択させる、毎回、前回の授業内容の復習、再確認をするなど様々な工夫がなされている。

根拠資料
シラバス、教科書、配布資料、映像等教材

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか

シラバスは、思想的、理論的科目の場合は、講義の性質上おのずと限界があるが、各項目について概ねこまかく予告、解説されている。

根拠資料
シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか

学生への履修指導は適切に行われていると考えている。具体的には、第一回の授業時に詳細なガイダンスを実施する、ガイダンスの内容を記した資料を配布するなどの工夫を行い、受講生に対し授業科目の詳細な内容が伝わるよう丁寧な説明がこころがけている。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援を適切に行っている。

根拠資料

シラバス、配布資料、授業振り返りアンケート結果

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか

行き届かない部分も当然あるだろうが、可能な範囲で行われている。具体的には、質問を受け付け、授業時において回答する、設定したオフィスアワーを活用する、そのほか個別の支援の要望に対し柔軟に対応するなど、さまざまな工夫がなされている。授業後の様々の質問にも、時間が許すかぎり答えている。

根拠資料

シラバス、配布資料、授業振り返りアンケート結果

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか

成績評価基準についてはシラバスにおいて明示されている。そして、その基準に則った成績評価が適切に実施されている。また、成績評価基準を授業時に受講生に対し詳しく説明するなどの工夫も行われている。科目単位での成績分布を確認し、適正でない場合には、適正な分布になるように促すよう努めている。概ね適正である。

根拠資料

シラバス、試験答案、成績分布（国際教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか

多人数のクラスの場合、どうしても一定程度の限界があることは否めない。しかしながら、ひとりひとりの教員の努力と創意工夫により、受講生の学習成果は上がるよう努力している。本大学の学生のポテンシャルの高さでもあろうが、試験の出来は悪くなく、きわめて優秀な答案を書けるまでになる人材も、常に一定程度存在している。学生を対象とした授業振り返りアンケートの結果からも、人間と社会教育部会の授業では適切な学習成果があがっていると考えられる。

根拠資料

試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果